かざぐるま

越境する技術支援

E2　池田知隆（ジャーナリスト）

「国境なき技師団」をご存知ですか。医師団や記者団は知っていたが、技師団のことは本が送られてくるまで何も知らなかった。

「国境なき技師団　スマトラ島から東北へ―災害復興支援の15年―」（濱田政則ら著者6人、早稲田新書）。本の送り主は、私の社会部記者時代に親しくなった共同通信ＯＢのＴさん。初々しい新人記者だったＴさんも退職し、早稲田大学出版会編集部長に就任していた。約40年ぶりの便りには熱い思いが綴られていた。

「記者としては何もできませんでしたが、いま新書の出版に追われています。大学出版会としては１９８９年に東京大学出版会の『東大新書』が廃刊されて以来の試み。知恵をお貸しください」

「国境なき技師団」は、医師団とは援助に使う技能が異なるだけで、医療技術ではなく、エンジニアリング技術を使う。救える命は一つでも多く救う。救えた命は限りなく幸せになってほしいと願い、幸せの道筋をつけていく点は同じ。予防接種や外科技術の代わりに、防災教育や耐震技術を通じて命を救おうと、２００４年12月のスマトラ沖地震・インド洋大津波をきっかけに設立された。

多くの災害に見舞われる日本は「防災先進国」でもある。日本の高度経済成長期に培った土木、建築技術などはシニア技術者個人（団塊世代、年金受給世代）に埋もれている。長年にわたって働き、苦闘し、知恵をだしてきた技術者は、豊富な現場経験と知識、そして人脈を併せ持っている。「最後のお勤め」としてシニア技術者が社会で果たす役割は大きい、というのだ。

インドネシア、バングラデッシュ、パキスタン、中国での復興を支援し、東日本大震災の被災自治体にシニア技師を派遣してきた。国際協力機構（ＪＩＣＡ）などが国の機関として技術協力しているが、防災技術をめぐって民間で緊急援助する意義は確かにある。

人が生きるうえで無駄はなく、どこかに活きている。なにか社会に貢献したいというＴさんの意欲に触れてそう思う。コロナ禍でナショナリズムが高まり、最新技術の囲い込みも強まっている。国境を超えて善意と支援を保とうとする試みは大切にしたい。